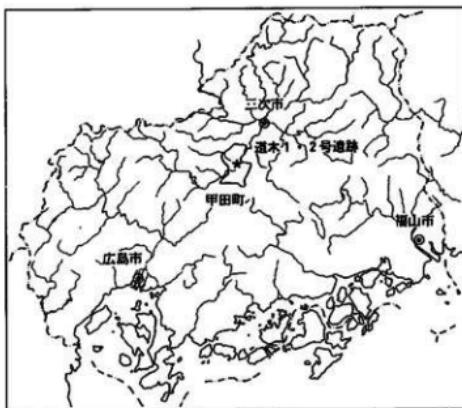


# 道木1・2号遺跡

2001

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

# 道木1・2号遺跡



2001

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

## 例　言

- 1 本書は、2000(平成12)年度に発掘調査を実施した県営農村活性化住環境整備事業(甲立地区)に係る道木1・2号遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが、広島県可部農林事務所から委託を受けて実施した。
- 3 発掘調査は、調査研究員恵谷泰典・刎本英博が行った。
- 4 出土遺物の整理・実測・写真撮影は上記の者が行った。
- 5 本書の執筆は、I～Ⅲを刎本が、IV・Vを恵谷が分担して行い、恵谷が編集した。
- 6 本書に使用した造構の表示記号は次のとおりである。  
S A : 棚列 S B : 竪穴住居跡・掘立柱建物跡 S D : 溝状遺構 S K : 土坑  
P : 柱穴、ピット
- 7 第1図は、建設省国土地理院発行の1:25,000の地形図(安芸横田・甲立)を複写して使用した。
- 8 掘図中の北方位は、すべて国土座標第Ⅲ系北による。
- 9 土器実測図の断面は、須恵器が黒ヌリ、陶磁器はアミ目、他は白ヌキである。
- 10 掘図と図版の遺物番号は一致し、通し番号である。

## 目　次

I はじめに.....	1
II 位置と環境.....	2
III 調査の概要.....	6
IV 遺構と遺物	
(1) 道木1号遺跡.....	8
(2) 道木2号遺跡.....	14
V まとめ.....	23

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1:25,000)	3
第2図	遺跡位置図 (1:10,000)	5
第3図	調査区配置図 (1:2,000)	7
第4図	1号遺跡A区遺構配置図 (1:200)	8
第5図	S B 1 実測図 (1:40)	8
第6図	S K 1 実測図 (1:30)	9
第7図	1号遺跡B区遺構配置図 (1:200)	9
第8図	S K 2 実測図 (1:30)	10
第9図	1号遺跡C区遺構配置図 (1:200)	10
第10図	S K 3・4 実測図 (1:30)	11
第11図	1号遺跡出土遺物実測図 (1:3)	13
第12図	2号遺跡A区遺構配置図 (1:200)	14
第13図	S B 1・2 実測図 (1:40)	14
第14図	2号遺跡B区遺構配置図 (1:200)	15
第15図	S B 3 実測図 (1:40)	16
第16図	S B 4 実測図 (1:40)	18
第17図	S B 5 実測図 (1:40)	18
第18図	S K 1 実測図 (1:30)	19
第19図	S A 1 実測図 (1:40)	19
第20図	S D 1・3 実測図 (1:40)	20
第21図	2号遺跡出土遺物実測図 (1:3)	21

## 図版目次

図版 1 a	道木 1・2 号遺跡遠景 (東から)	図版 5 a	2号遺跡B区全景 (南西から)
b	1号遺跡A区全景 (東から)	b	S B 3 実掘 (南東から)
c	S B 1 実掘 (北東から)	c	S B 3 実掘 (北東から)
図版 2 a	S K 1 実掘 (東から)	図版 6 a	S B 4・5 実掘 (南東から)
b	1号遺跡B区全景 (南から)	b	S K 1 実掘 (東から)
c	S K 2 セクション (北から)	c	S D 1・2, S A 1 実掘 (南西から)
図版 3 a	1号遺跡C区全景 (南から)	図版 7 a	S D 1・2, S A 1 実掘 (南東から)
b	S K 3・4 実掘 (東から)	b	S D 3 (南から)
c	S K 4 実掘 (南から)	c	作業風景
図版 4 a	2号遺跡A区全景 (南から)	図版 8	出土遺物 1
b	S B 1 実掘 (東から)	図版 9	出土遺物 2
c	S B 2 実掘 (東から)		

## I はじめに

道木1・2号遺跡の発掘調査は、高田郡甲田町における県営農村活性化住環境整備事業（甲立地区）に係るものである。

同事業は、広島県可部農林事務所（以下「可部農林」という。）によって施行されている。「活き活きとした、明るく潤いのある住みよい“緑と花と果実のまち”甲田町」というキャッチフレーズのもと、農地の整備改善、用排水路・道路・公園・防火設備等の整備により、地域の主産業である農業の基盤整備を進め、地域住民の住みよい環境の創造を目的としている。

甲田町は、1997(平成9)年8月15日付けで、当計画地内の文化財等の有無及び取扱いについて、甲田町教育委員会（以下「町教委」という。）に協議し、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に通知した。県教委はこれを受けて、町教委とともに開発計画地内の踏査を行い、1998年2月19日付けで、町教委に対して遺跡の有無を確認するための試掘調査が5か所必要である旨を事業者に対して指導するよう通知した。町から工事を依頼されている可部農林は、これを受けて1999年9月10日付けで、町教委に対して、試掘調査を必要とした5か所のうち3か所の試掘調査を依頼した。県教委は、町教委とともに試掘調査を実施し、当該計画予定地内に道木1・2号遺跡を確認した。

この遺跡の取扱いについて、県教委、町教委と可部農林で協議した結果、一部の工事部分に関して現状保存は困難であるという結論に達し、可部農林は2000年3月1日付けで文化庁に対して、埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）を行い、同日、県教委は可部農林あてに工事着手に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。発掘調査に関しては、同年3月6日付けで可部農林から県教委あてに発掘調査の依頼があり、同日、県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が行うことが適当であると通知した。これを受けセンターやは、同年4月14日付けで埋蔵文化財発掘調査の届出を県教委あてに提出した。また、可部農林とセンターとの間で、同年5月1日付けで委託契約を結び、5月8日から7月7日までの約2か月間発掘調査を実施した。なお、7月1日に町教委主催で遺跡見学会を開催し、約70名の参加を得た。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の資料として、また、当地域の歴史の一端を知る一助となれば幸いである。

なお、発掘調査の経費は、農林省構造改善局と文化庁長官の覚書「文化財保護法の一部改正に関する覚書」5項に基づき、可部農林が事業者負担分85%を、文化庁からの補助金を受けた県教委が15%を負担した。

発掘調査にあたっては、広島県可部農林事務所、高田地方農村整備事業所、甲立土地改良区、甲田町教育委員会及び地元の方々の多大な協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

## II 位置と環境

道木1号遺跡は高田郡甲田町大字下甲立千財972, 973番地に、道木2号遺跡は高田郡甲田町大字下甲立花の木867-1, 870番地に所在する。

甲田町は広島県のほぼ中央部に位置し、広島市へ約50kmの距離にある。周囲は標高200mから500mのゆるやかな山々に囲まれている。町の中央を広島市と島根県宍道町を結ぶ国道54号が江の川に沿って縦貫している。また、JR芸備線が県道広島三次線に並行して走っており、古今を通して交通の要衝である。

山県郡大朝町に源を発する江の川は、町内を西から東に流れ、町内のほぼ中央で戸島川と合流し流れを北に変え緩やかに蛇行する。甲田町の市街地は主に江の川とその支流の氾濫原上に広がっており、平坦地の多くでは水稻耕作が行われている。一方、山麓緩斜面では果樹栽培が行われている。

以下、町内の遺跡を時代順に概観する。

### 旧石器・縄文時代

今までに旧石器・縄文時代に属する遺跡は確認されていない。

### 弥生時代

上小原所在の翁平遺跡<sup>(1)</sup>があり、弥生時代中期の甕や壺が出土している。この遺跡は、標高約300m、周辺耕地との比高約100mの高所にあり、遺物の出土状況では巨岩の周囲から弥生土器が1個体ずつ3か所に埋めてあったといわれていることなどから、祭祀に関連する遺跡と考えられている。

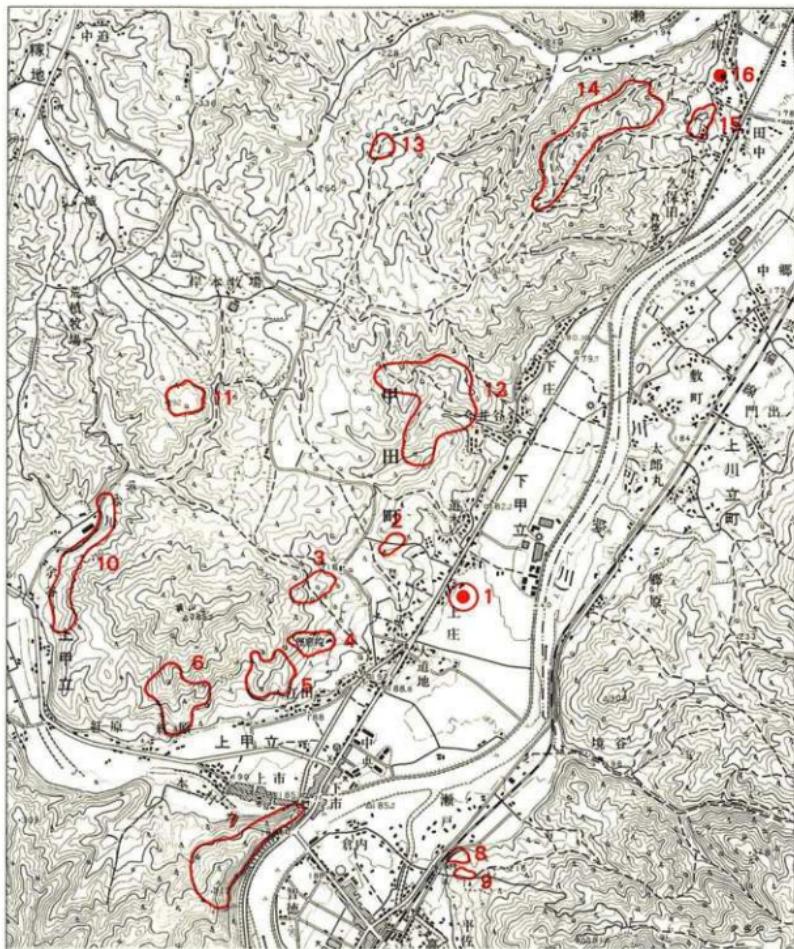
### 古墳時代

町内には、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後半期の古墳が400基以上あり、小円墳が10～20基ずつ群をなしている。しかし発掘調査が行われた古墳は谷上第1号古墳<sup>(2)</sup>、法恩地南古墳<sup>(3)</sup>のほか数例に過ぎず、個々の古墳の実態は不明確な点が多い。6世紀後半の横穴式石室を内部主体とする円墳と推定される荒神古墳<sup>(4)</sup>からは勾玉、切子玉、金環、金銅製主頭太刀などが出土し、その一部は県の重要文化財に指定されている。このほか、箱式石棺を内部主体とした井才田北第8号古墳、上山田第3号古墳や、本地域ではまれな井才田横穴墓が存在する。

集落跡について発掘調査が行われた遺跡は、内長見遺跡<sup>(5)</sup>、祇園迫1号遺跡<sup>(6)</sup>、同2号遺跡<sup>(7)</sup>、幸地屋遺跡<sup>(8)</sup>、青迫1号遺跡、同2号遺跡<sup>(9)</sup>である。幸地屋遺跡が町北部の江の川流域に位置するほかは、すべて町南部の戸島川流域に位置する。中期から後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡が検出され土師器、須恵器が出土している。

### 古代

内長見遺跡、祇園迫1号遺跡、同2号遺跡、青迫2号遺跡からは、7～8世紀頃の土器が出土している。その中で祇園迫2号遺跡や青迫2号遺跡から出土した須恵器には墨書き土器も含まれている。



第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

- |            |          |           |              |
|------------|----------|-----------|--------------|
| 1 道木1・2号遺跡 | 2 道木古墳群  | 3 菊山北古墳群  | 4 菊山東古墳群     |
| 5 柳ヶ城跡     | 6 菊山古墳群  | 7 五龍城跡    | 8 平佐八幡神社裏古墳群 |
| 9 寺組北古墳群   | 10 余谷古墳群 | 11 余谷北古墳群 | 12 下甲立古墳群    |
| 13 深瀬北古墳群  | 14 深瀬古墳群 | 15 田中古墳群  | 16 幸地屋遺跡     |

## 中世

町内一帯は、建武元(1334)年に宍戸朝家（初め朝重と称したが後に改名）が安芸守に任じられ安芸国甲立庄を賜って以来、宍戸氏が代々支配した。また、当地域は毛利氏の居城であった高田郡吉田町の郡山城跡に隣接した地域であり、天文2(1533)年に毛利元就は、當時反目していた第7代宍戸元源と和睦し親密な関係となった。そのため町内には宍戸氏や毛利氏に関連した城跡が点在する。柳ヶ城跡(宍戸氏)、五龍城跡(宍戸氏)、釜ヶ城跡(三上氏)、長見山城跡(渡辺氏)などが確認されている<sup>⑩</sup>。

集落跡については、内長見遺跡、紙圓迫1号遺跡、同2号遺跡、青迫2号遺跡において掘立柱建物跡が検出され、土師質土器、陶磁器などが出土している。

古墓は、上甲立ほかの各所に宍戸家一族の墓、長見山城跡の付近には渡辺氏の墓が伝えられているなど、その所在が多く知られている。しかし、発掘調査を行った例は少ない。そのなかで山田積石塚<sup>⑪</sup>は発掘調査が行われ、備前焼の骨蔵器と多数の土師質土器などが出土した。16世紀後半、上甲立の地域に勢力を張った小南氏に関連する墓と推定されている。

## 参考文献

- 甲田町教育委員会 「甲田町誌」 1967年  
西本省三他編集 「日本城郭体系第13巻 広島・岡山」 新人物往来社 1980年

## 註

- (1) 高田郡史編纂委員会 「高田郡史」上巻 1972年
- (2) 広島県教育委員会・甲田町教育委員会 「谷上第1号古墳緊急調査概報」 1983年
- (3) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 「法恩地南古墳」 1984年
- (4) (1)と同じ
- (5) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 「内長見遺跡」 1992年
- (6) 甲田町教育委員会 「紙圓迫1号遺跡」 1993年
- (7) 甲田町教育委員会 「紙圓迫2号遺跡」 1994年
- (8) 甲田町教育委員会 「幸地屋遺跡」 1994年
- (9) 甲田町教育委員会 「青迫遺跡」 1995年
- (10) 広島県教育委員会 「広島県中世城館遺跡総合調査報告書」第2集 1994年
- (11) 甲田町文化財保護委員会 「山田積石塚発掘調査報告」 1972年



第2図 遺跡位置図 (1 : 10,000)

### III 調査の概要

遺木1・2号遺跡は高田郡甲田町下甲立に所在する。遺跡は東西のなだらかな丘陵にはさまれた沖積面の中央部やや西寄りに位置する。遺跡の東を江の川が蛇行しながら北に向かって流れる。

調査範囲は圃場整備により造成される部分が対象となったため、不規則な形で5か所の調査区が設定された。1号遺跡をA～C区、2号遺跡をA、B区とした。調査区は国土座標第Ⅲ系北に沿って各区ごとに10mグリッドを設定した。調査にあたっては、まず重機によって耕作土の掘削を行い、その後人力で遺構面の精査を行った。

#### (1) 1号遺跡

A区 1号A区は東西に広がる平坦面である。基本層序は、淡褐色土（耕作土）・黄褐色土（地山）であり、地山の表面で遺構を確認した。遺構は、掘立柱建物跡1棟（SB1）、土坑1基（SK1）、ピット30個余りを検出した。遺物は、土師器・須恵器・土師質土器・陶磁器などが出土している。

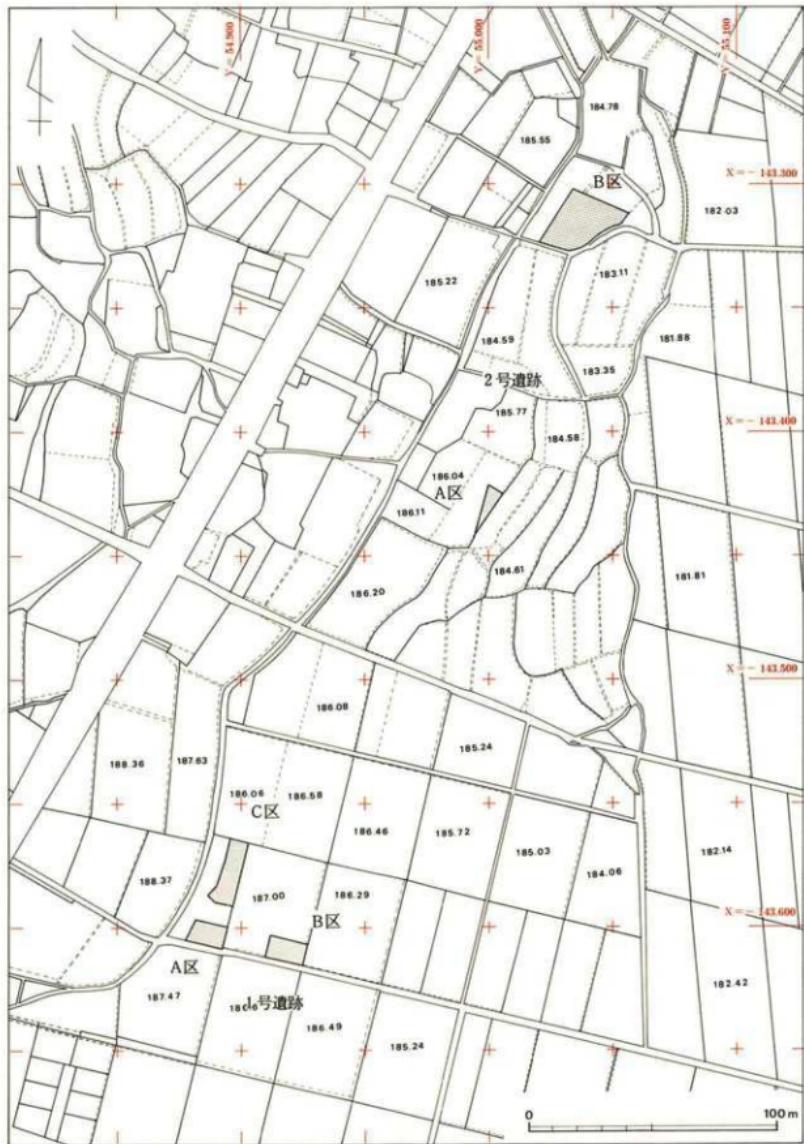
B区 1号B区は、1号A・C区と高低差があり、B区の方が低い。基本層序は、淡褐色土（耕作土）・黄褐色土（水田の基盤）・灰褐色土・暗褐色土（遺物包含層）・黄褐色土（地山）であり、地山の表面で遺構を確認した。遺構は、土坑1基（SK2）、ピット10個余りを検出した。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶磁器などが出土しているが、ほとんどは包含層からである。

C区 1号C区は1号A区に隣接し、南側はA区から続く遺構面である。北側は、南側を東西に掘られた溝によって隔てられる。平坦面であるが、わずかな数のピットのほか遺構はみられない。基本層序は、淡褐色土（耕作土）・暗黄褐色土（盛土）・褐色土（遺物包含層）・黄褐色土（地山）であり、地山の表面で遺構を検出した。遺構は、土坑2基（SK3・4）、ピット数個を検出した。遺物は、土師器・須恵器・土師質土器・陶磁器・鉄滓・硯・古錢などが出土している。

#### (2) 2号遺跡

A区 2号A区は三角形をした調査区であり、北側は谷になっている。基本層序は、褐色土（耕作土）・黒褐色土・黄褐色土～橙褐色土～黄灰色土（地山）であり、地山の表面で遺構を検出した。遺構は、竪穴住居跡2軒（SB1・2）、柱穴10個余りを検出した。遺物は、土師器・須恵器・土師質土器などが出土している。

B区 2号B区は東端が谷になっており、高低差は約1mになる。基本層序は、褐色土（耕作土）・暗褐色土（遺物包含層）・灰黄褐色土～黄褐色土～暗黄灰色土（地山）であり、地山の表面で遺構を確認した。遺構は、掘立柱建物跡3棟（SB3～5）、土坑1基（SK1）、溝状遺構3条（SD1～3）、樋状遺構1列（SA1）、ピット100個余りを検出した。遺物は、土師器・須恵器・土師質土器・須恵質土器・磁器・土錠・窯道具などが出土している。



第3図 調査区配置図（1:2,000）（アミ目は調査区）

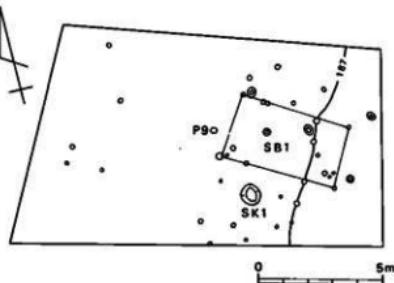
## IV 遺構と遺物

### (1) 道木1号遺跡

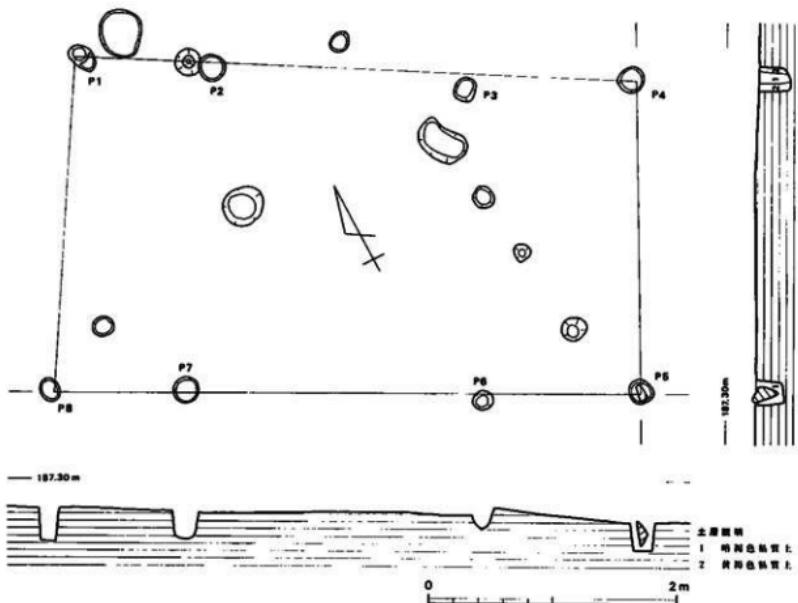
#### A区 (第4図、図版1-b)

A区は、調査範囲の最南部にある。南北方向8~9m、東西方向13~15mの調査区である。調査前の状況は水田で、標高は約187.3mである。また、本調査区とC区は同じ耕作面であるが、中間に設定された道路が盛土による造成のため別の調査区となっている。

調査の結果、掘立柱建物跡1棟(SB1)、土坑1基(SK1)、ピット約30個を検出した。遺構面はほぼ平坦であるが、SB1の東側に段があり、西から東に向かい緩や



第4図 1号遺跡A区遺構配置図 (1:200)



第5図 SB1実測図 (1:40)

かに傾斜しており、高低差は約20cmである。また、調査区西端に溝を確認したが、明治時代以降のものである。なお、この溝はC区へ延びる。

#### 遺構

##### S B 1 (第5図、図版1-c)

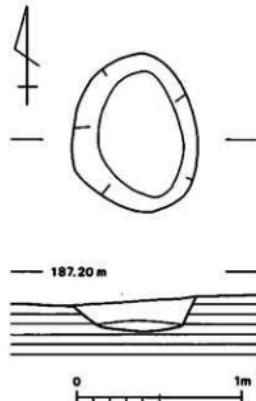
S B 1は、調査区東側で検出した掘立柱建物跡である。建物規模は、桁行3間(4.5~4.8m)×梁行1間(2.5~2.7m)で、桁行方向はN60°Wを指向する。柱間距離は、P 1-P 2・P 7-P 8が1.1m、P 3-P 4・P 5-P 6が1.4mと、P 2-P 3、P 6-P 7の2.1~2.4mと比べると狭くなっている。柱穴規模は、径15~20cm、深さ10~35cmである。また、柱穴のうちP 1-P 4-P 5-P 8は、いずれも深さ30cm以上で、P 2-P 3-P 6-P 7の深さ10~20cmと比べると底面レベルも深く安定している。P 4では柱痕が検出され、径10cm程度の柱が想定できる。柱痕の周囲には黄褐色粘質土が確認でき、裏込めの土と考えられる。他の柱穴内埋土は単一土層で、褐~暗褐色粘質土である。

また、P 5からは根石とおもわれる石が確認された。遺物は、P 2から須恵器の破片が、近接したピット(P 9)から土師器、須恵器の杯(第11図1)が出土している。

遺構の時期は、出土遺物から古代と考えられるが、規模などから中世まで降る可能性もある。

##### S K 1 (第6図、図版2-a)

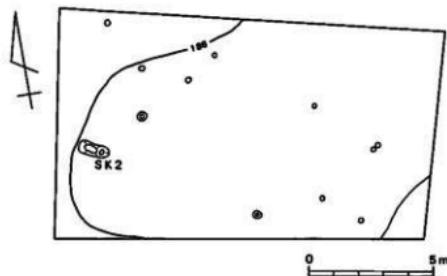
S B 1の南に位置する土坑である。平面形は橢円形で、大きさは長軸0.95m、短軸0.8m、深さ20cmである。壁面は緩やかで、底面は中央部がややくぼむ。埋土は褐色粘質土の単一土層である。遺物が出土しておらず、時期・性格は不明である。



第6図 SK 1実測図 (1:30)

#### B区 (第7図、図版2-b)

B区はA区の東約17mの調査範囲東端に位置する。南北方向約9m、東西方向約15mの調査区である。調査前の状況は、A区より1段下の水田で、標高は約187.0mである。旧地形が河川による浸食を受けていることから、耕作地基盤を造成するための盛土が想定されていた。遺構面は旧地表から約1mの深さで確認でき、西から東に傾斜しており、高低差は約40cmである。



第7図 1号遺跡B区遺構配置図 (1:200)

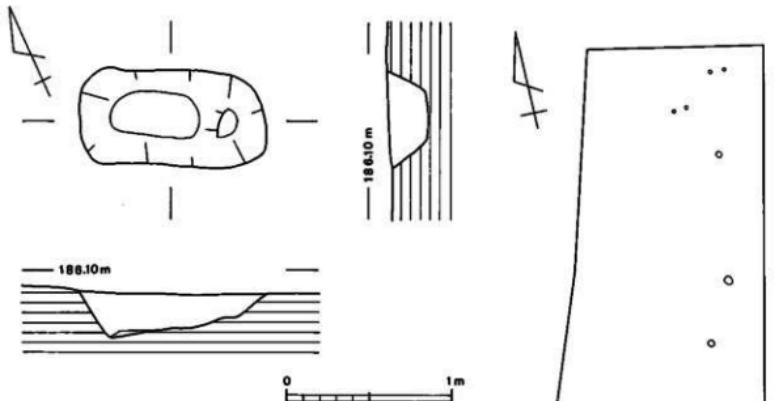
盛土の下は分厚い遺物包含層で、流れ込みの遺物が多数出土した。

調査の結果、土坑1基(SK2)、ピット10個余りを検出した。遺物は、土師器壺(第11図7)、須恵器壺(第11図8)・瓶(第11図9・10)、青磁碗(第11図6)など出土したが、すべて包含層からである。

#### 遺構

##### SK2 (第8図、図版2-c)

調査区の東端に位置する土坑である。平面形は隅丸長方形で、規模は長さ1.1m、幅0.6m、深さ30cmである。壁面の立ち上がりは急でなく、底面は東側に幅10cm、高低差10cmの段をもち、西に向かい緩やかに傾斜する。埋土は、暗褐色粘質土の单一土層である。遺物が出土していないことから、時期・性格は不明である。



第8図 SK2実測図 (1:30)

##### C区 (第9図、図版3-a)

C区は、A区の北約8mの位置にある。東西方向7~10m、南北方向約26mの細長い調査区で、標高は約187.3mである。遺構面は、A区と同様に耕作土直下の地山面を想定していたが、調査区北側約3/4の範囲は水田の基盤を造成した盛土であることが判明し、掘り下げたところ0.3m下に地山面を確認した。

調査の結果、土坑2基(SK3・4)、ピット8個を確認した。A区から続く溝、および調査区南側の東西方向の溝は、明治時代の圃場整備以降のものである。



第9図 1号追跡C区遺構配置図  
(1:200)

## 遺構

### SK 3 (第10図、図版3-b)

調査区南端、SK 4の南側0.6mに位置する土坑である。平面形はほぼ正円形で、規模は1.45×1.55m、後世の削平を受けているため、深さは最大10cmである。底面はほぼ平坦で、埋土は暗褐色粘質土である。遺物は須恵器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

遺構の時期は古代以降と考えられ、性格不明である。

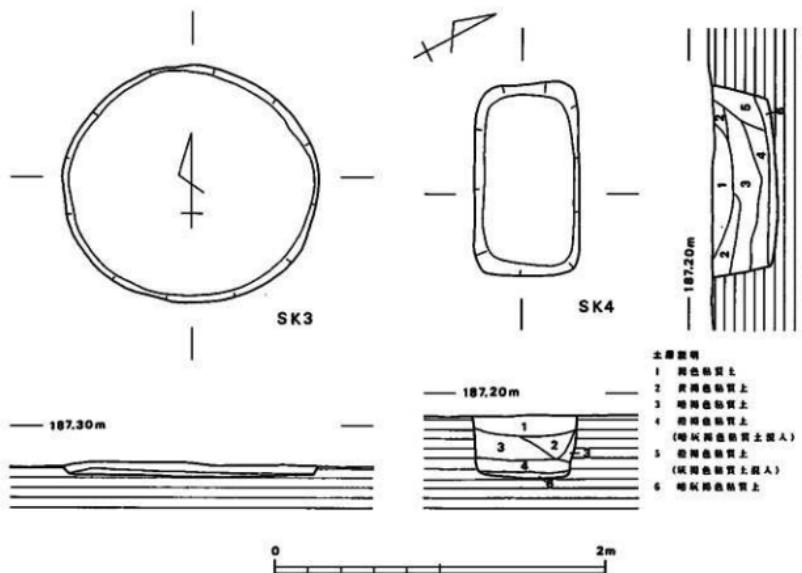
### SK 4 (第10図、図版3-b・c)

調査区の南側、SK 3の北側0.6mに位置する土坑である。平面形は隅丸長方形で、規模は長さ1.15m、幅0.64m、深さ40cmである。主軸方位は、N62°Wを指向する。壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面は平坦である。遺物は第1層上面から近世陶磁器が、第3層以下から土師器・須恵器の杯(第11図11)が出土している。

近世陶磁器が後世の流れ込みとおもわれることから、遺構の時期は古代以降と考えられ、墓塚の可能性がある。

### 遺物 (第11図、図版8・9)

1はA区(P 9)、2~10はB区の包含層、11~18はC区(11以外は表土)からの出土である。



第10図 SK 3・4実測図 (1:30)

須恵器(1・4・5・8~12) 1は杯の底部である。底径は10.0cmで、外底面は回転ヘラ切り調整、内底面は回転ナデである。胎土は1mm未満の砂粒を含み、色調は淡灰色、焼成良好である。4は杯の底部である。高台は低く、底面に凹みをもつ。調整は回転ナデである。胎土には1mm未満の砂粒を含み、色調は青灰色、焼成良好である。5は杯身の底部である。外底面は回転ヘラ切り調整、内底面は不定方向のナデを施す。胎土には微砂粒を含み、色調は赤褐色、焼成良好である。8は壺の胴部~底部である。胴部は丸みを帯び、最大径は20.4cm、貼り付け高台は径12.8cmで、端部を下に屈曲させ薄くおさめる。調整は、内外面とともに回転ナデで一部回転ヘラ削り、内外底面はナデである。胎土には1~2mmの砂粒を多く含み、色調は灰白色、焼成不良である。9~10は壺の口縁部と底部で同一個体とおもわれるが、把手の部分は出土していない。9の口縁部はやや肥厚し、復元口径は25cmである。10の底部は底面を平坦におさめ、底径は12.8cmである。調整は、外面に板状工具による横方向のナデ・押圧痕、内面にヨコナデ(一部に同心円叩き)・成形時の粘土継ぎ目がみられる。胎土には1~2mmの砂粒を含み、色調は灰白色、焼成良好である。11は杯の底部である。高台は貼り付けで、断面は三角形、回転ナデを施す。胎土には微砂粒を含み、色調は灰白色、焼成良好である。12は壺の口縁部である。逆ハの字に開き、端部は薄い。内外面ともヨコナデである。胎土には1~2mmの砂粒を含み、色調は淡青灰色、焼成良好である。

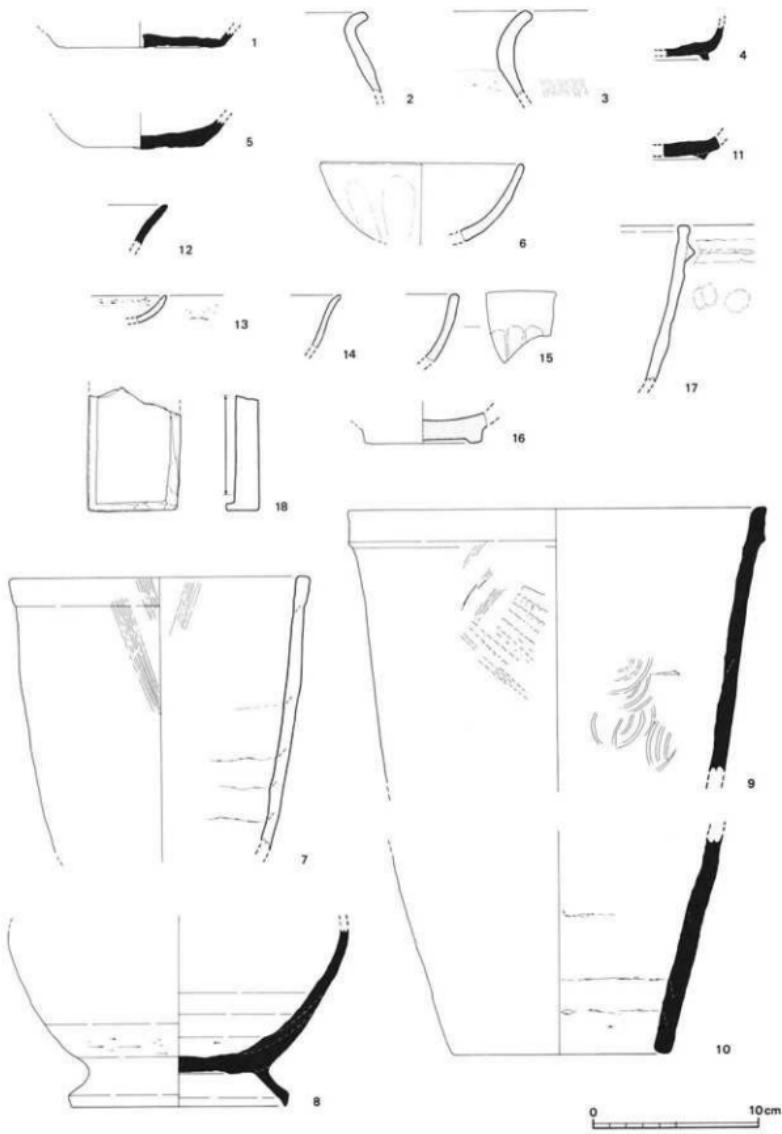
土師器(2・3・7) 2・3は壺の口縁部である。全体的に磨滅しているが、外面にハケ目、内面にヘラ削りがみられる。胎土には1~2mmの大砂粒を含み、色調は淡黄灰~褐色、軟質である。7は壺の口縁部~体部である。体部は直立気味に立ち上がり、口縁端部はやや肥厚し、復元口径17.5cmである。外面には粗い縱方向のハケ目、内面には成形時の粘土継ぎ目がみられる。胎土には1mmの大砂粒を含み、色調は淡黄灰色、焼成不良である。

土師質土器(17) 土鍋の口縁部~体部である。口縁部外面直下に貼り付け突堤状の頭をもち、口縁端部は平坦である。直立気味に立ち上がる体部外面には、煤の付着が顕著にみられる。内外面にはナデが施され、一部指頭圧痕がみられる。胎土には1~2mmの大砂粒を多く含み、色調は灰褐色、やや軟質である。

中国製磁器(6・15・16) 6・15は青磁碗の口縁部で、いずれも龍泉窯系とおもわれる。6の外面には蓮弁文が描かれ、緑灰色の釉を内外面に施す。復元口径12.0cmである。15はやや細かい蓮弁文が描かれ、内外面には明青灰色の釉が施される。16は白磁碗の底部で、復元高台径7.0cmである。底部は厚く、高台は断面逆台形に削り出している。内底面には灰白色の釉を施すが、外底面は無釉である。すべて胎土は精緻、焼成硬級である。

肥前系磁器(13・14) 13は赤絵の皿の口縁部である。内外面に灰白色の釉を施し、内面上半には唐草文と界線、外面下半には花文を描いているが、赤色顔料はすべて剥がれ落ちている。14は碗か鉢の口縁部である。口縁端部をわずかに外反させ、面取りしている。内外面に灰白色の釉を施しているが、端部内面は無釉である。ともに胎土は精緻、焼成硬級である。

硯(18) 石州系の硯の破片で、使用面は研磨されている。それ以外の面は赤褐色の釉が施され、部分的に砂の付着がみられる。胎土は非常に精緻で、焼成硬級である。地元の産とおもわれる。



第11図 1号遺跡出土遺物実測図 (1 : 3)

## (2) 道木2号遺跡

### A区 (第12図、図版4-a)

A区は1号遺跡の北約160mに位置する。長さ約19m、幅約6mの三角形状の調査区である。調査前の状況は水田で、標高は約186.0mである。遺構面までの深さは0.3~0.9mで、北に向かって傾斜する。

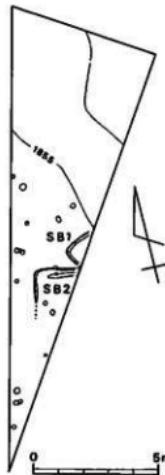
調査の結果、竪穴住居跡2軒(SB1・2)、ピット10数個を検出した。

#### 遺構

##### SB1 (第13図、図版4-b)

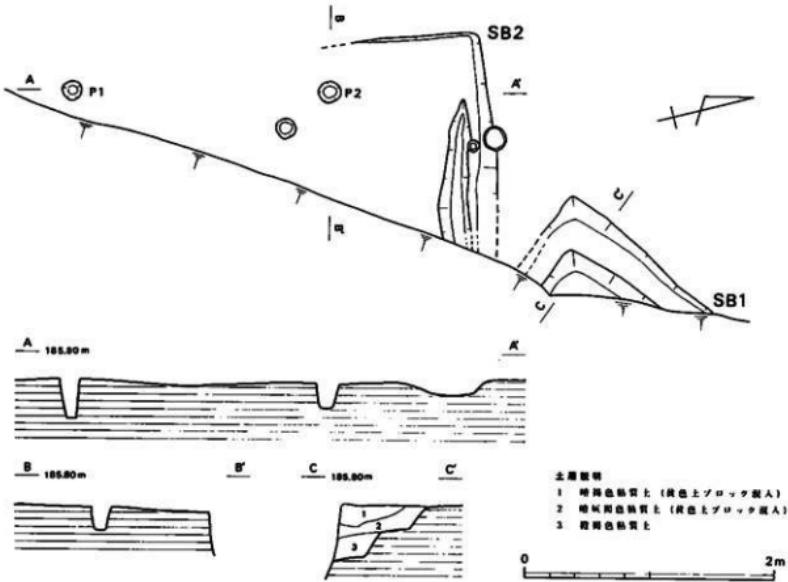
調査区中央部の東端に位置する竪穴住居跡である。残存状態は悪く、後世の耕作地造成により遺構のほとんどを失っている。平面形は方形とおもわれ、壁は北西側1.5m、南西側0.7mを確認した。深さは20~40cmで、全体の規模と柱穴は不明である。遺構は二段掘りで、第3層の橙褐色粘質土は貼床と考えられる。遺物は土師器、須恵器が出土しているが、細片のため図示し得なかった。

遺構の時期は、出土遺物から古墳時代と考えられる。



第12図 2号遺跡A区遺構

配置図 (1:200)

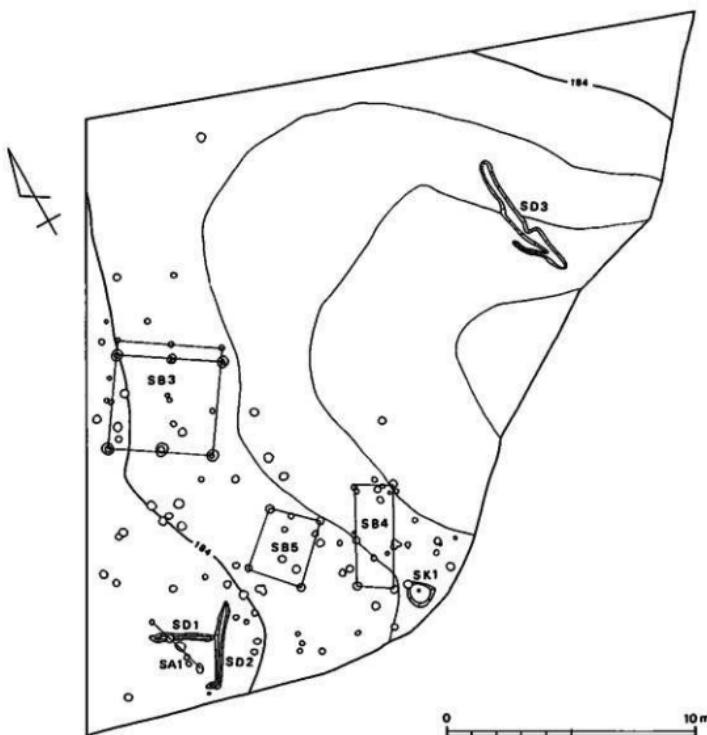


第13図 SB1・2実測図 (1:40)

SB 2 (第13図、図版4-c)

SB 2はSB 1の南側に近接して位置する竪穴住居跡である。遺構の残存状態は悪く、東側を半分以上失い、耕作による削平も顕著である。平面形は方形とおもわれ、壁は北側1.6m、西側1.0m、壁高は最大で10cm残る。壁溝は北側のみ確認でき、長さ1.1m、幅20cm、深さ10cmである。床面はほぼ平坦で、柱穴3個を検出し、規模は径15~20cm、深さ15~35cm、柱間距離は2.1m(P1-P2)である。柱穴内埋土は灰褐色粘質土の單一土層である。遺物は、埋土から土師器・須恵器の細片が出土した。また、遺構検出面から近世の擂鉢(第21図19)が出土しているが、流れ込みとおもわれる。遺構本来の規模は一辺5m、4本柱の竪穴住居跡と推定される。

時期はSB 1と同様に古墳時代と考えられるが、新旧関係は不明である。

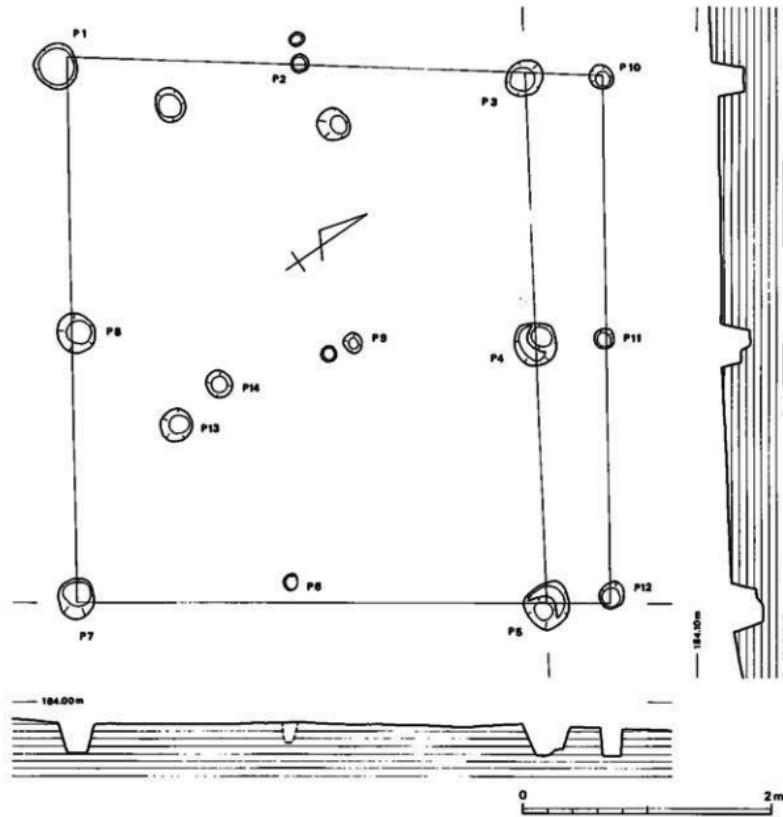


第14図 2号遺跡B区遺構配置図 (1:200)

### B区（第14図、図版5-a）

B区は、A区の北約100mに位置し、長さ・幅とともに約25mと調査区のなかでは最も大きい。調査前の状況は水田で、標高は約184.4mである。遺構面までの深さは0.2~1.2mで、調査区中央部は北から南に傾斜する谷となっている。

調査の結果、掘立柱建物跡3棟(SB3~5)、土坑1基(SK1)、柵列1(SA1)、溝状遺構3(SD1~3)、ピット約100個を確認した。遺構は調査区西側に集中し、谷部の東側にはほとんど存在していない。また、調査区外へ延びる遺構もあるとおもわれるが、後世の削平や未調査区域のため明確にできなかった。遺物はほとんどが流れ込みである。



第15図 SB3実測図 (1:40)

### 遺構

#### S B 3 (第15図、図版5-b・c)

S B 3は、調査区西端に位置する掘立柱建物跡である。建物規模は、桁行2間(4.3m)×梁行2間(3.8m)で、桁行方向はN57°Wを指向する。柱間距離は桁行2.1-2.2m、梁行1.7-2.1mである。柱穴規模は、P 1・P 3~5・P 7・P 8で径30~40cm、深さ25~37cm、中央のP 2・P 6・P 9は径10~15cm、深さ12~16cmと小規模である。底面レベルは地形に対応して東に向かって下がる。また桁行柱穴(P 3~5)に対応して、建物の北西側0.5~0.6mの位置に柱穴列(P 10~12)が確認された。柱間距離は2.1m、規模は径15~20cm、深さ13~24cmで、規模と位置関係から建物の廊部分と考えられる。柱穴内埋土は、暗褐色~黒褐色粘質土の单一土層である。遺物は、P 1から土師質土器皿(第21図31)、P 3から須恵器・土師質土器の破片、P 4・P 5から土師質土器・須恵質土器の破片、P 7・P 8・P 12から土師質土器の破片、P 11から青磁碗(第21図26)が出土した。また、遺構と直接には関係ないが、P 13から土師質土器鍋(第21図21)、P 14から土師質土器皿(第21図27)、瀬戸・美濃焼天目茶碗(第21図25)が出土した。

遺構の時期は、出土遺物から中世と考えられる。

#### S B 4 (第16図、図版6-a)

S B 4は、調査区南側に位置する掘立柱建物跡である。建物規模は、桁行2間(3.9~4.2m)×梁行1間(1.5m)で、やや細長い建物である。桁行方向はN27°Eを指向する。柱間距離は西桁行P 1から1.9~2.1m、東桁行P 4から2.3~1.9mで、東側の桁行が長い。梁行は南北とも1.5mで等しい。柱穴規模は、径30~40cm、深さ25~40cmで、底面レベルは北に向かって下がる。P 5では柱底が検出され、径15cm程度の柱が想定できる。柱穴内埋土はほとんど单一土層で、暗褐色~黒褐色粘質土である。P 5では、柱痕とおもわれる暗灰褐色粘質土の周囲に振り方の埋土である黄灰褐色粘質土がみられる。遺物は、P 2・P 5・P 6から土師質土器の破片、P 3から須恵器杯(第21図24)が出土した。

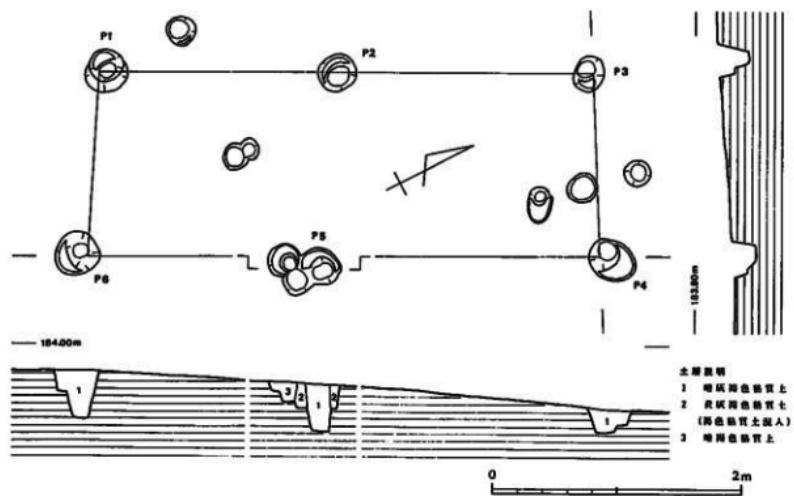
遺構の時期は、出土遺物から古代~中世と考えられる。

#### S B 5 (第17図、図版6-a)

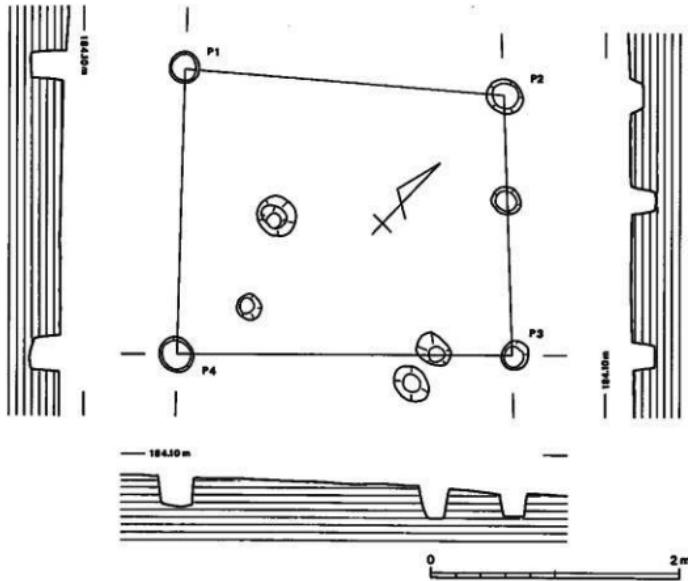
S B 5は、調査区南側S B 4の西隣に位置する掘立柱建物跡である。建物規模は、桁行1間×梁行1間で、桁行方向はN48°Eを指向する。柱間規模は、桁行P 1-P 2が2.6m、P 3-P 4が2.7m、梁行P 2-P 3が2.1m、P 4-P 1が2.3mと一定していない。柱穴規模は径25~30cm、深さ10~25cmで、底面レベルは東に向かって下がる。柱穴内埋土はいずれも单一土層で、暗褐色~暗灰褐色粘質土である。遺物は、P 1から須恵器・土師質土器の破片、P 2・P 3から土師質土器の破片が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

遺構の時期は、出土遺物から古代~中世と考えられる。

なお、調査区で検出したピット約100個のうち約6割から遺物が出土し、大部分は土師質土器の小片である。これらのピットは、当時何らか機能していたとおもわれる。また、第21図の出土地点不掲載のものはすべて流れ込みの遺物である。



第16図 SB 4実測図 (1:40)

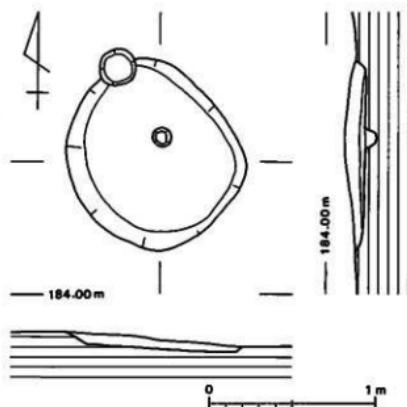


第17図 SB 5実測図 (1:40)

### S K 1 (第18図、図版6-b)

S K 1は調査区南端に位置し、S B 4に近接する。後世の削平を受けており、平面形は不整円形で、長軸1.1m、短軸1.0m、深さ10cmである。壁面は緩やかで、底面はほぼ平坦である。底面中央付近に径10cm程度のビットがあるが、遺構検出面より掘り込まれていることから土坑には伴わない。埋土は褐色粘質土の單一土層である。遺物は、土師質土器の破片が出土した。

遺構の時期は中世と考えられるが、性格については不明である。

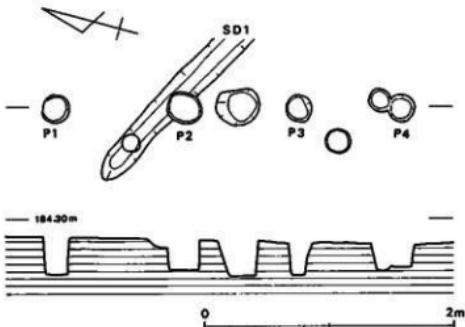


第18図 S K 1 実測図 (1:30)

### S A 1 (第19図、図版6-c)

S A 1は、調査区西側に位置する柵列である。4本の柱穴で構成され、主軸方向はN15°Wを指向する。柱間規格は0.8~1.1m、柱穴規格は、径22~28cm、深さ18~30cmで、底面レベルはほぼ一定している。柱穴内埋土は、灰褐~暗灰褐色粘質土である。遺物は、P 2・P 4から土師質土器の破片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

遺構の時期は、中世と考えられる。



第19図 S A 1 実測図 (1:40)

### S D 1 (第20図、図版6-c)

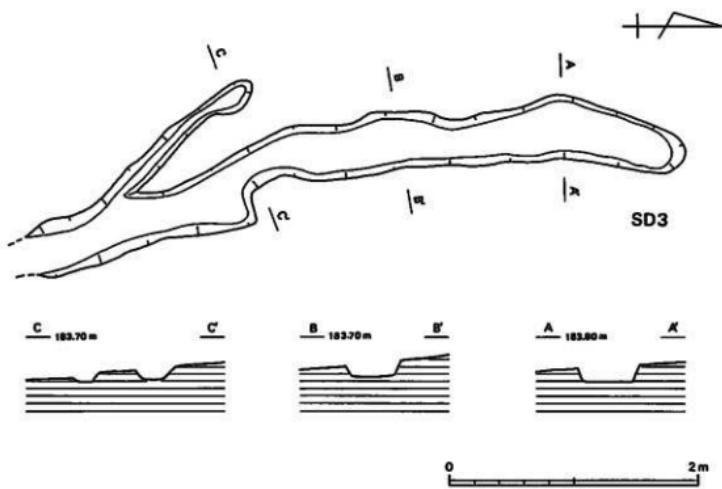
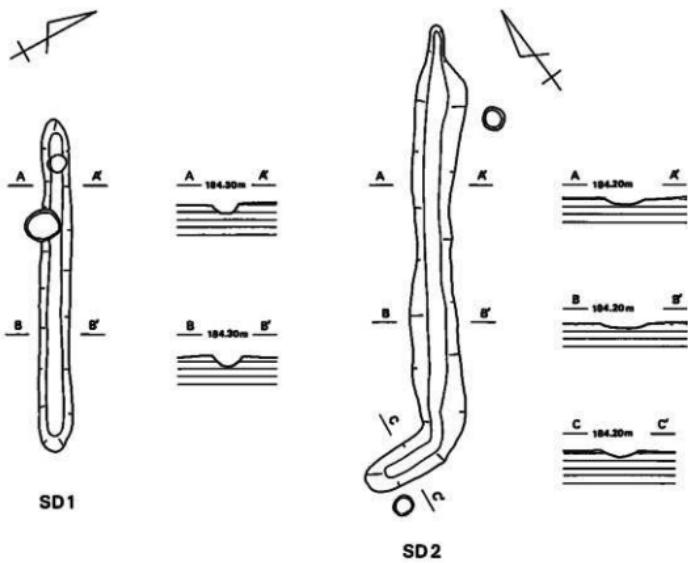
S D 1は調査区南西側に位置する溝である。規模は、長さ2.7m、幅20~25cm、深さ5~10cmである。主軸方位は、N60°Wを指向する。埋土は、淡褐色粘質土の單一土層である。遺物は、土師質土器の破片が出土した。

S A 1と交差し、新旧関係はS D 1→S A 1の順である。

遺構の時期は、出土遺物から中世と考えられる。

### S D 2 (第20図、図版7-a)

S D 2は調査区南西側、S D 1の東に隣接して位置している。規模は、長さ4.0m、幅10~40cm、深さ5cmである。主軸方位は、N37°Eを指向し、南端部を西方向に屈曲する。埋土は、淡



第20図 SD1～3実測図 (1:40)

灰褐色の单一土層である。SD 1とはほぼ直行するが、新旧関係は不明である。遺物は出土せず、遺構の時期・性格とも不明である。

#### SD 3 (第20図、図版7-b)

SD 3は調査区東側に唯一存在する遺構である。南北方向に長く伸び、規模は、長さ5.4m、幅30~60cm、深さ5~15cmである。断面は逆台形である。底面は北から南に向けて傾斜し、高低差は約20cmである。遺構の南北両端には、北西に伸びる長さ1.4m、幅20cm、深さ5cmの小規模な溝が付属するが、新旧関係等は不明である。埋土は黒褐色粘質土の单一土層である。遺物は、須恵器・土師質土器の破片が出土した。

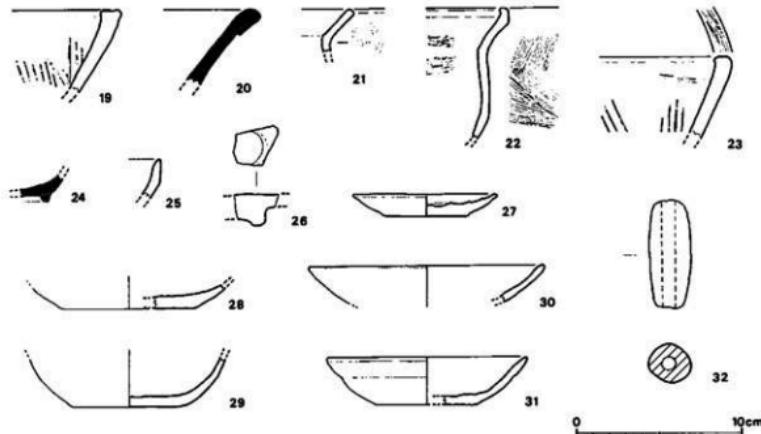
遺構の時期は、出土遺物から中世と考えられる。

#### 遺物 (第21図、図版9)

19はA区(SB 1表層)、20~32はB区の出土である(出土地点については前述)。

須恵器(20・24) 20は壺の口縁部で、端部を外に折り曲げて肥厚させている。外面には板状工具による横方向のナデ、それ以外は回転ナデを施す。胎土には1mm大の砂粒を含み、色調は暗灰色、焼成良好である。24は杯の底部で、高台は低く断面台形である。内外面とも回転ナデを施す。胎土には微砂粒を含み、色調は青灰色、焼成良好である。

土師質土器(21・22・27~31) 21・22は土鍋である。21の口縁部は逆ハの字に外反し、内外面には一部ハケ目がみられる。胎土には1mm未満の砂粒を含み、色調は黒褐色、焼成良好である。22は口縁部から体部の破片で、口縁端部を直立気味に立ち上げる。内外面にハケ目を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は外面が灰褐色、内面が淡黄灰色を呈し、焼成良好である。



第21図 2号遺跡出土遺物実測図 (1 : 3)

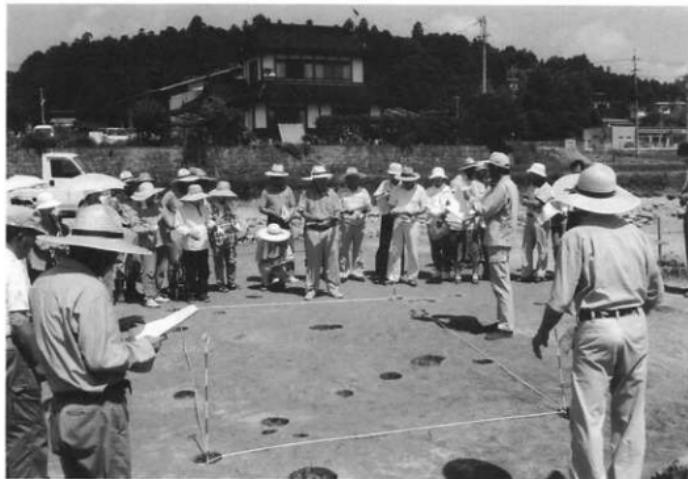
27～31は皿である。27は口径8.5cm、底径5.0cm、器高1.3cm(いずれも復元)で、底面は回転糸切り、それ以外は回転ナデである。内面には煤が付着していることから、灯明皿とおもわれる。胎土には微砂粒を含み、色調は淡灰橙色、焼成良好である。28は復元底径8.0cmで、胎土には1mm大の砂粒を含み、色調は淡黄橙色、焼成不良である。29は復元底径6.8cmで、胎土には1mm大の砂粒を含み、色調は灰白色、焼成不良である。30は復元口径14.0cmで、胎土には1mm未満の砂粒を含み、色調は淡黄灰色、焼成不良である。28～30は磨滅のため、調整不明である。31は口径11.8cm、底径6.0cm、器高2.9cm(いずれも復元)で、底部は回転糸切り、それ以外は回転ナデを施す。胎土には1mm未満の砂粒を含み、色調は淡黄橙色、焼成良好である。

須恵質土器(19・23)ともに擂鉢の口縁部である。19は端部を肥厚させ、内面には擂り目を施しているが単位は不明である。胎土には1mm未満の砂粒を含み、色調は灰黄色、やや軟質である。23は端部上面にハケ目、内面に擂り目と横方向のハケ目を施している。胎土には1～2mm大の砂粒を含み、色調は淡黄橙色、焼成良好である。

瀬戸・美濃焼(25)天目茶碗の口縁部で、内外面に鉄釉がかかる。胎土は精緻、色調は黒褐色、焼成良好である。

青磁(26)碗の底部で、分厚い造りである。内底面には草花文らしき文様が描かれており、内外面すべてに緑灰色の釉がかかる。胎土は精緻、焼成硬質である。

土製品(32)土錐で、中央部がややふくらんでいる。長さ6.5cm、最大径2.4cm、重量37.34gである。中心には径0.8cmの孔があけられ、全体にナデが施される。胎土には1mm大の砂粒を含み、色調は淡灰黄色、やや軟質である。



遺跡見学会風景

## V まとめ

今回調査した道木1・2号遺跡では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・柵列・溝状造構・ピット群を検出した。工事との関係で調査区が狭く、かつ分散していたため、遺跡の全容を明確にすることはできなかったが、それぞれの遺跡について概略的に述べ、まとめてみたい。

### (1) 道木1号遺跡について

道木1号遺跡は3つの調査区に分かれるが、調査した範囲は約50m四方と限定されながらも、遺構の時期・性格は古代～中世の集落跡とほぼ共通している。A区からは掘立柱建物跡・土坑・ピット群、B区からは土坑・ピット群、C区からは土坑をそれぞれ確認したが、遺構の密度は薄い。立地はA区とC区が標高187mの同じ平坦面で、B区の標高は186mと約1m下がる。遺跡周辺は明治時代に大規模な圃場整備が行われており、B区では多量の流入土や盛土が確認された。当時の地形としては、西から東に向かい緩やかに傾斜していたことがわかる。現在、遺跡の約500m東方には江の川が流れているが、下甲立地区は江の川とその支流の本村川などの支流が合流することから、古くからの氾濫原であったことは容易に推定でき、遺跡から川にかけての土層の堆積状況や耕作地の区画の形などからすると、かつては調査区の近くまで河川が流れていた可能性がある。また、ほとんどの遺物は、遺構内ではなく遺構検出面より上の遺物包含層、いわゆる流れ込みの層から出土していることから、集落の中心は調査した区域より西側の斜面上に存在していたと推定できる。これら地形的状況や、遺構の密度・遺物の出土状況からみて、今回の調査区は当時の集落の端に近い部分と考えられる。

### (2) 道木2号遺跡について

道木2号遺跡は2つの調査区に分かれ、調査区の間は距離にして約100m、高低差は約1.6mである。A区からは古墳時代の竪穴住居跡、B区では古代～中世の掘立柱建物跡を確認したが、同じ遺跡でも様相を異にしている。A区は古墳時代の集落跡であるが、遺跡周辺では同時代の集落遺跡は確認されていない。しかし、遺跡の西側丘陵には古墳時代後期の横穴式石室をもつ群集墳が数多く存在しており、何らかの関連性をうかがうことができる。B区は古代～中世の集落跡で、今回の調査で最も多く遺構が確認された。この調査区も耕作基盤整備による盛土が顕著にみられ、元の地形は浅い谷となり東側の川に向かって傾斜する。遺構の検出状況からみて、調査区域の西側に遺構の拡がりが考えられるが、東側は現時点では不明である。地形の状況を考慮すると、集落の中心は1号遺跡と同様に調査区域の西側の山麓から延びる緩斜面上に想定できる。このことは、遺物が遺構検出面より上層から多数出土していることからも概ね首肯できよう。

以上、道木1号遺跡・道木2号遺跡についてそれぞれ述べてきたが、共通していえることは遺跡の範囲が西側へさらに拡がっており、調査区は遺跡の端部といつても大過ないことがある。つ

まり集落の中心は、川よりむしろ山に近い場所(現在の国道54号より西側の丘陵部)にあったとおもわれる。その上で遺跡の性格について考えてみると、出土遺物のうち中世の遺物が大部分を占めていることから、同時代の遺跡として本遺跡から約1km南西にある本村川北岸の柳ヶ城跡との関連を考慮する必要があろう。甲立地区は中世後期以降、宍戸氏の所領として知られており、柳ヶ城には宍戸氏が居を構え、山麓の平野部には一門・家臣団の屋敷などが存在していたと伝えられている。また、現在本遺跡から約300m西方の丘陵上には男山神社をはじめとして多くの社があり、古地図などをみると当時から遺跡周辺には宍戸氏の墓所や社・寺跡などが所在していたことが確認されている。さらに、この地域は江の川に沿った山陰へのルート上にあり、高宮方面・三和方面への分岐点になっていることから、当時から交通の要衝として重要な位置を占めていたとおもわれる。(『芸藩通志』によると、付近には「十日市」の地名が記載されていることから商業の拠点でもあったとおもわれる。)これらのことから遺跡の周辺地域は、中世の頃から政治的・経済的な中心地としてある程度の規模で集落が形成されていたと推定でき、本遺跡もその一部であったと考えられよう。遺跡の性格としては、調査範囲が限定されているので必ずしも明確ではないが、川に近く当時から水田を営んでいたと推測でき、その立地条件や遺構の規模などから農耕を中心として漁撈などに従事していた人々が居住していた中世の農村であった可能性が考えられる。

今回の調査では限定された調査区であったため、道木1号遺跡・道木2号遺跡それぞれの性格や抜かりを必ずしも明確にできなかったことが課題として残されるが、今後さらに同地域の調査が行われることでより甲田町内の歴史が解明されよう。

#### 参考文献

『藝藩通志』

高田郡史編纂委員会『高田郡史』上巻 1972年

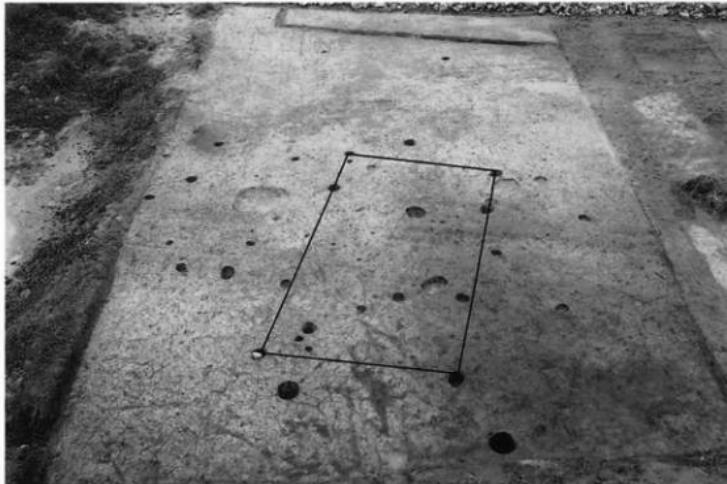
甲田町教育委員会『甲田町誌』1967年

『広島県の地名』平凡社 1982年

a 道木1・2号遺跡遠景  
(東から)

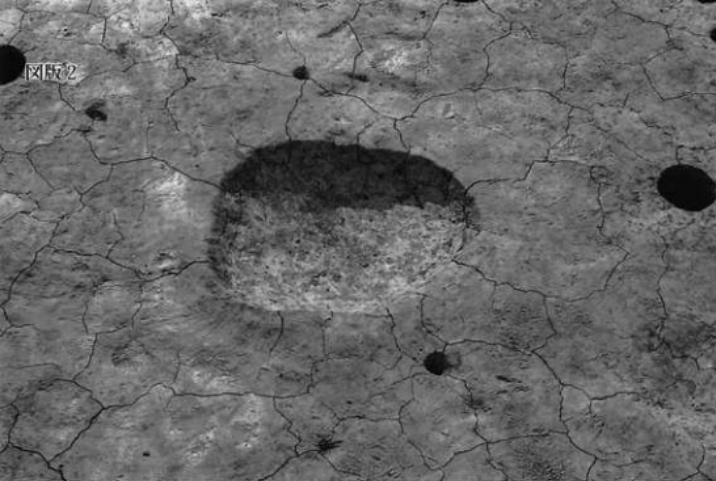


b 1号遺跡A区全景  
(東から)



c S B 1 完掘  
(北東から)





a SK 1 完掘  
(東から)



b 1号遺跡B区全景  
(南から)

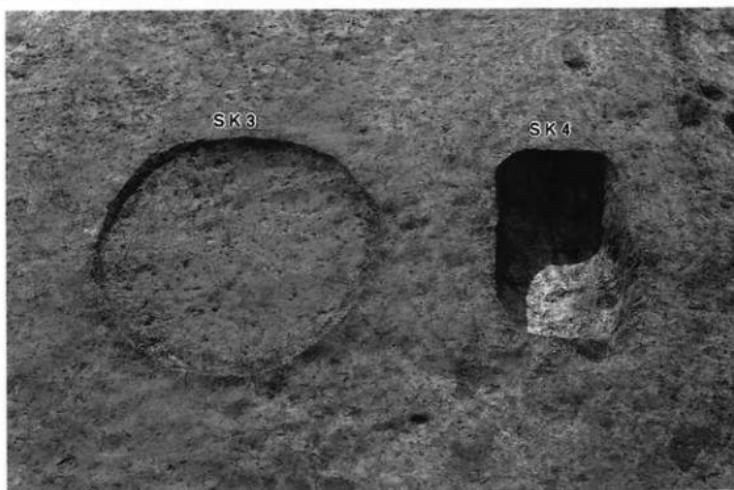


c SK 2 セクション  
(北から)

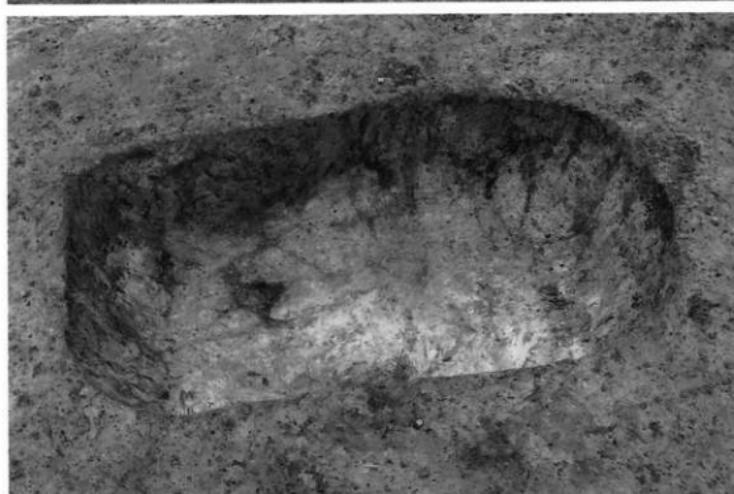
a 1号遺跡C区全景  
(南から)



b SK3・4完掘  
(東から)



c SK4完掘  
(南から)





a 2号遺跡A区全景  
(南から)



b SB 1 完掘  
(東から)

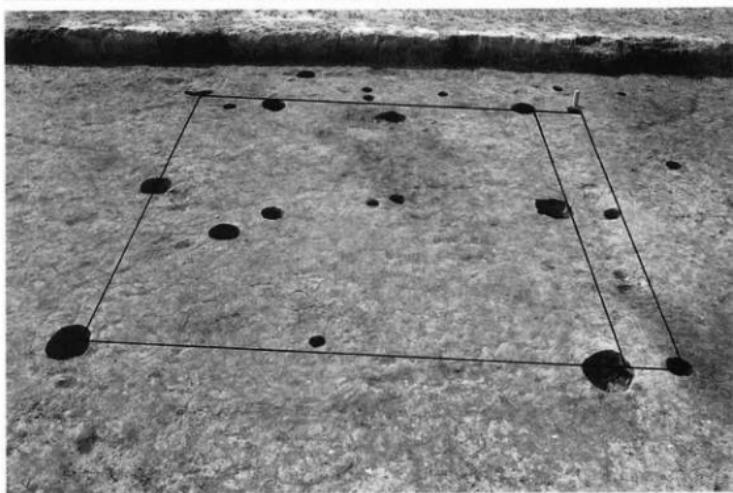


c SB 2 完掘  
(東から)

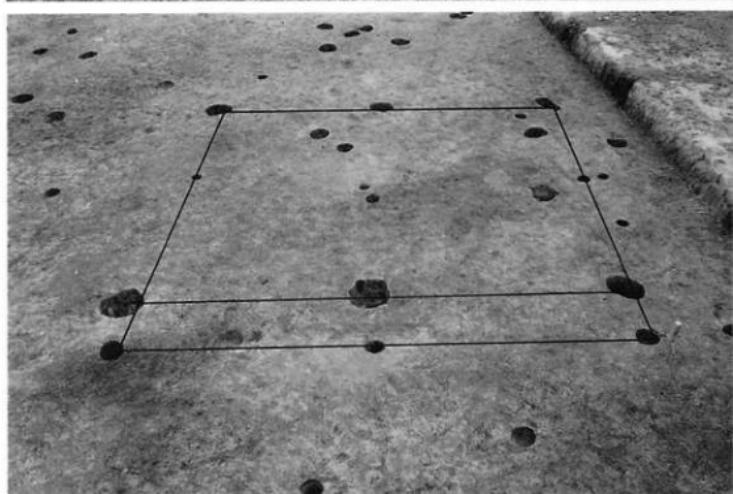
a 2号遺跡B区全景  
(南西から)



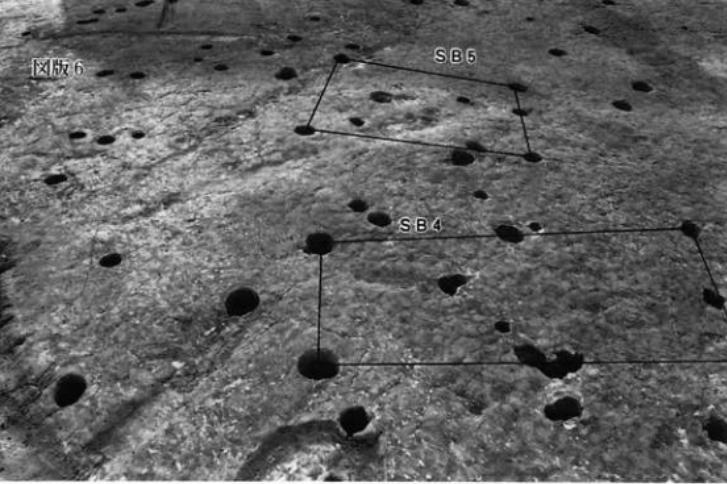
b SB3完掘  
(南東から)



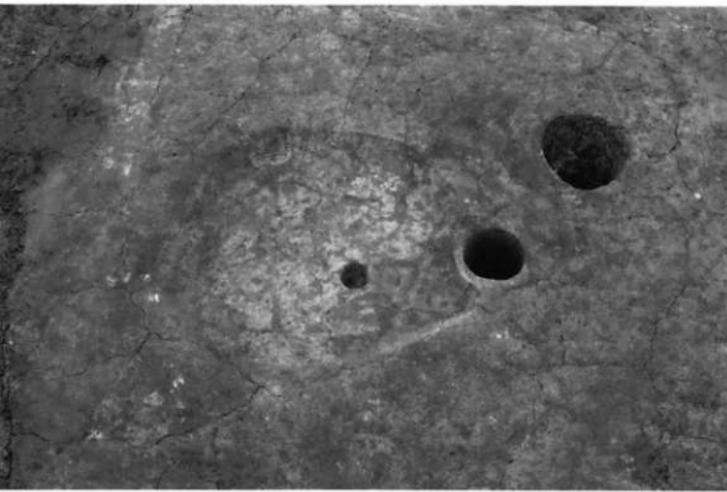
c SB3完掘  
(北東から)



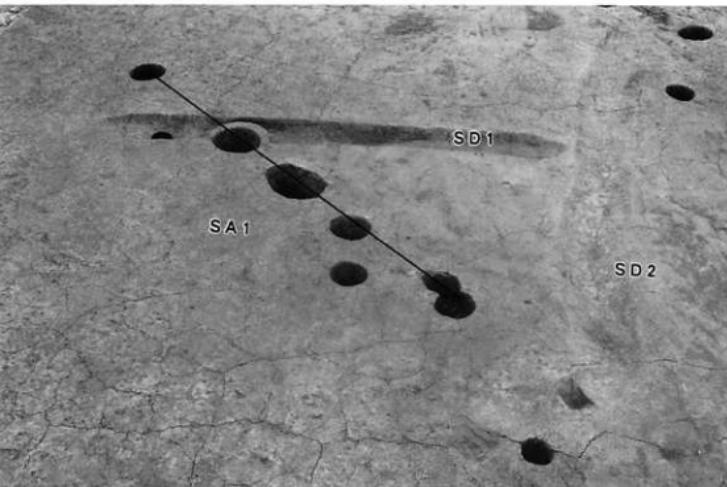
図版6



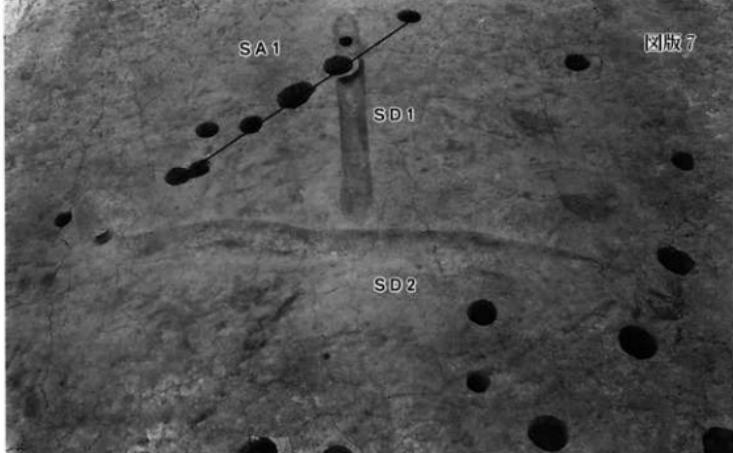
a SB4・5完掘  
(南東から)



b SK1完掘  
(東から)



c SD1・2,  
SA1完掘  
(南西から)



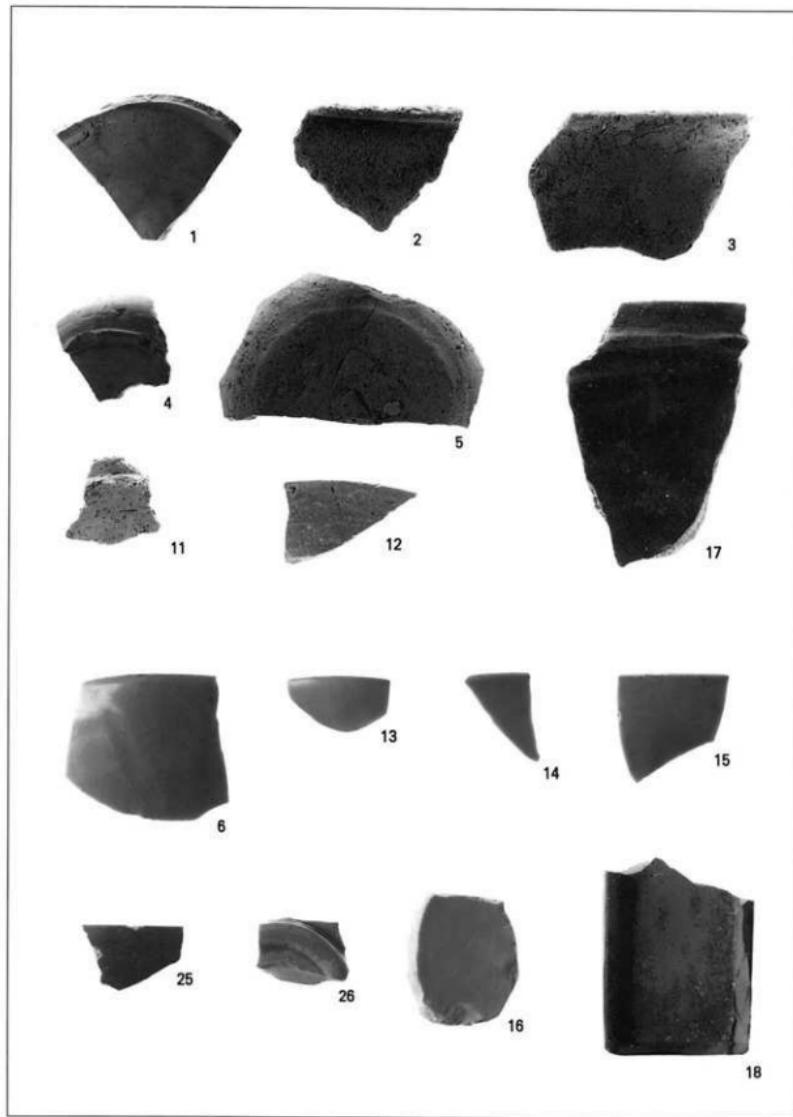
a SD1・2,  
SA1完掘  
(南東から)



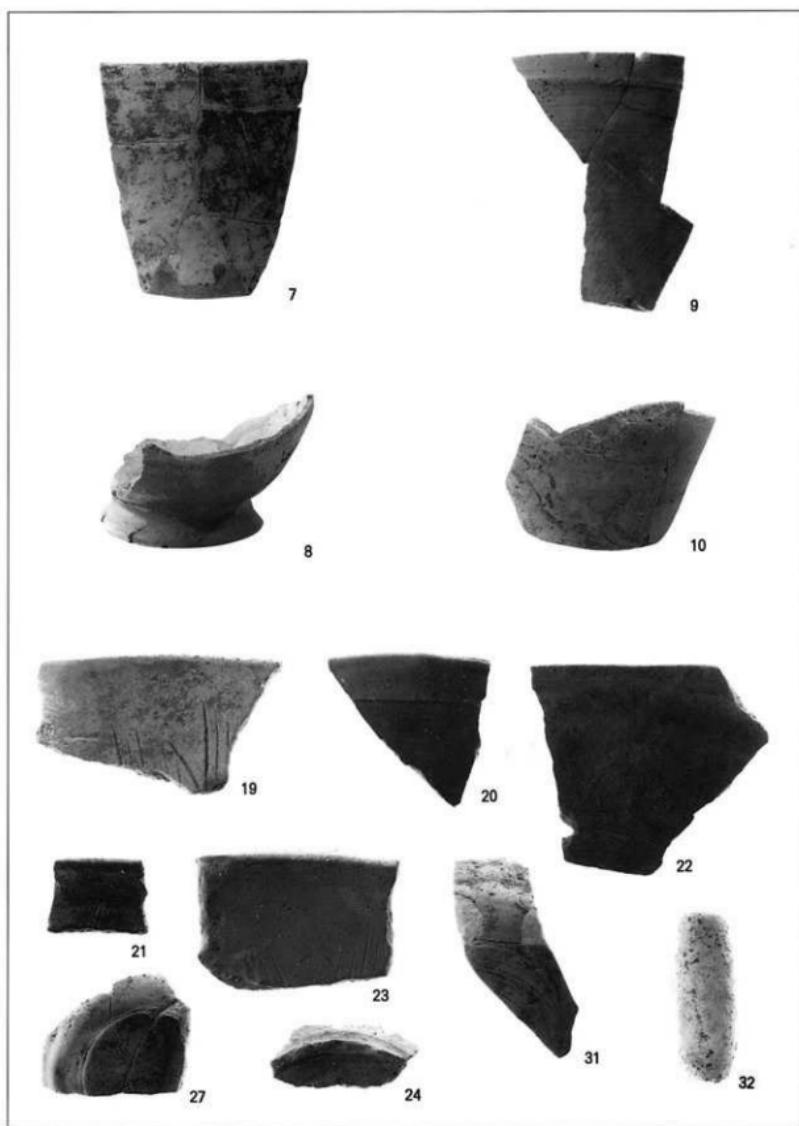
b SD3  
(南から)



c 作業風景



出土遺物 1



出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	どうぎ1・2ごういせき							
書名	道木1・2号遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第196集							
編著者名	恵谷泰典・朝本英博							
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区鏡音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
	市町村	遺跡番号	°	'	"			
道木1号遺跡	広島県呉市 郡申田町大字下申立千財 972,973番地	34385	472	34度 42分 15秒	132度 45分 57秒	20000508 ～ 20000707	505	県営農村活性化住環境整備事業(甲立地区)に係る発掘調査
道木2号遺跡	広島県呉市 郡申田町大字下申立花の木867-1,870番地		473	34度 42分 23秒	132度 46分 05秒		565	
所蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
道木1号遺跡	集落	古代	掘立柱建物跡	1棟	土師器 須恵器			
		中世	土坑 ピット	4基	土師質土器 国産磁器(肥前系) 輸入磁器(青磁、白磁) 硯(石州系)			
道木2号遺跡		古墳	竪穴住居跡	2軒	土師器 須恵器			
	古代	掘立柱建物跡	3棟	須恵器				
	中世	土坑 溝状造構 柵状造構 ピット	1基 3条 1列	土師質土器 須恵質土器 国産陶器(瀬戸・美濃焼) 輸入磁器(青磁) 土鍋				

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第196集  
道木1・2号遺跡  
発行日 2001(平成13)年3月30日

編集・発行 財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター  
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号  
TEL(082)295-5751

印刷所 大和印刷株式会社